

生徒が主体的に取り組む授業の工夫
—生徒のやる気を引き出す2つの実践—

千葉県立〇〇〇〇高等学校 〇〇 〇〇 (外国語)

1 研究の背景と目的

教科書を広げて静かに聞いてはいるものの、ノートに書くだけで満足し、本文の内容を理解していない生徒はたくさんいる。私が今まで出会った中には「英単語を覚える」という作業をしてこなかった生徒もいる。辞書を買って持っていることも意識していない。中学校で「分からない」と言えば、その都度教師が単語の意味を教えてくれたというのである。信じられない思いで他のクラスでも単語練習の仕方を聞いてみたところ、「単語って覚えなきゃいけないのですか」と逆に質問された。

中学校の英語を批判しているのではない。中学校3年間で英語の基礎をまったく身につけていない生徒、及び単語を覚える努力をしないまま高校に入学してきた生徒が相当数いるという事実を述べているだけである。「勉強をするために学校に来ている」という自覚のない生徒を相手に生活指導で日々奮闘し、まるで一人芝居のような授業の繰り返しで途方に暮れたことは数え切れない。中学校で学ぶべきことが全く身につけていない生徒を授業に巻き込むにはどうすればいいのだろうか。また、前日の授業内容に関する質問に、ノートを見てもまったく答えることができない生徒に対して、どのような目標を持たせればいいのだろうか。

本研究では、生徒が主体的に授業に参加するために様々な活動を取り入れたい。分からない単語があれば辞書で自ら調べる、ノートに書くだけではなく書いた表現を声に出してみる、自分の考えを発表する、ペアワークで発音を確認し合う、などの活動を取り入れることにする。中でも活動の目的が理解しやすいペアワーク・グループワークに焦点をあてた。ペアワークやグループワークを取り入れることで生徒が主体的に授業に参加し、内容の定着が促されるのではないかと考えた。

Long&Porter (1985) はグループワークの有効性について、生徒が英語を使用する機会が増えるということだけでなく、生徒の学習のプロセスへの参画度を高め生徒を動機づける、と述べており、Johnson (1981)は目標に到達するためには個人よりも協力者がいるほうがはるかに効果的であると述べている。また Vygotsky (1988)は「今日子供たちが一緒にならでできることは、明日はひとりでもできる」、同じように Elbow (1990)は「始めはほかの人たちと一緒にのときにだけできたことは、ひとりでもするように学ぶことができる」とペアワークやグループワークを体験した生徒の、学習に対する自立についても示唆している。

この研究ではペアワークやグループワークの効果を測ると共に、生徒の情意面での変容を検証する。授業をただ聞いているだけでなく、ペアやグループで活動したという過程が、生徒のやりがい・満足感・充実感、そして今後の積極的な授業参加及び家庭学習につながるのではないかと考えこのテーマを設定した。

2 研究仮説

2.1 研究仮説1

ペアワーク・グループワークをすることで、生徒各自がやるべきことを自覚し、授業への

参加意欲が高められ、授業内容の理解が深まるだろう。

2.2 研究仮説 2

教員が生徒へ個別に声をかけることで、生徒の持続した学習意欲が保たれるだろう。

3 研究方法

3.1 先行研究

3.1.1. ペアワークのあり方

西林(2010)は、ペアワークをするということは生徒が主体となって活動することだと述べている。授業の効率化を図る上でも効果的であり、様々な活動を通じて英語に触れる量と英語を使う時間が一気に増える。また相手に対しての責任が生じるため、授業に対する集中力が高まり、生徒一人一人が授業に参加し自分たちで授業を作っているという思いが生まれるようである。ペアワークを成功させるための秘訣を西林は以下のように述べている。

- ① 活動の意図を明確にする。
- ② やり方を徹底する。
- ③ 複雑な活動にしない。
- ④ 活動は短時間で終わらせる。
- ⑤ やらせっぱなしにしない。
- ⑥ 人間関係を考慮する。

これに基づいてペアワーク活動を行う。

3.1.2 The Affective Filter Hypothesisに基づいて

情意の要因というものが、第二言語習得のプロセスにどのように関わっているか、Krashen(1982)は以下のように述べている。

- ① 動機 高い動機付けを持った学習者の方が、一般的には第二言語を効果的に習得する。
- ② 自信 自信とよい自己イメージを持っている学習者の方が、第二言語習得においては、効果的に学ぶ。
- ③ 不安 不安は低い方が第二言語取得を促進させるようである。

このことから、実験群に対しては授業中の活動や英語の学習に対して前向きになるような声かけや、活動内容の難易度を考慮することで、生徒が自信を持ってペアワークやグループワークに臨めるように授業の組み立てを工夫する。また生徒が不安を抱えたときにはいつでも力になることを授業を通して伝える。

3.1.3 動機付け

生徒のやる気をどう引き出すか、というのが課題の1つである。「分かれば楽しいし、楽しければやる気を起こす」というのが一番強力な学習の動機付けである。斉藤(1996)は楽しい授業にするための原則として以下のように述べている。

「楽しい授業にするための原則」

- ① 授業が自分の期待に応えてくれること。
- ② 授業の中で、自分が活動の主體的な参加者であること。
- ③ 授業の中で、自分の考えや判断が発揮できること。
- ④ 授業がわかること。

3.2 授業実践

- (1) ペアワーク・グループワークを取り入れた授業
- (2) 生徒のやる気を引き出す声かけや働きかけ

3.3 仮説検証

- (1) レッスンごとに行う小テスト結果の検証
- (2) 考査結果の検証
- (3) アンケートによる授業に対する意欲の変化の検証

4 研究内容

ペアワーク・グループワーク, 及び, 生徒のやる気を引き出すための声かけや働きかけがどのような効果をもたらすのか, 以下の点において検証する。

- (1) 生徒の授業に対する姿勢や意欲
- (2) 小テスト・考査の結果
- (3) 英語の学習に対する情意の変容

5 研究計画

5.1 対象生徒

平成23年度 2年生1クラス32名(実験群) 2年生2クラス58名(統制群)

平成24年度 1年生2クラス80名(実験群) 1年生1クラス40名(統制群)

5.2 指導科目

平成23年度 英語Ⅱ Vivid English Course Ⅱ (第一学習社)

平成24年度 英語Ⅰ Vivid English Course Ⅰ (第一学習社)

5.3 指導計画

平成23年6月～9月 ・先行研究, 文献研究, 生徒へのアンケート
やる気を引き出すための声かけ

10月～12月 ・授業実践① ペアワークでの音読練習
グループワークによる内容理解
生徒のやる気を引き出すための声かけや働きかけ

平成24年1月～2月 ・授業実践② 生徒のやる気を引き出すグループワーク
生徒のやる気を引き出すための声かけや働きかけ

3月 ・授業のアンケート/授業の反省/指導計画の見直し

平成24年4月～7月 ・授業実践③ ペアワーク・グループワークでの音読練習
グループワークによる内容理解

9月 ・研究報告書のまとめ

6 研究実践

6.1 平成23年度 授業に関して

6.1.1 ペアワークによる音読練習

クラス全体での音読では声を出しているように見えない生徒も、ペアワークでは取り組んでいた。音読の範囲を決め、1分間で相手に聞こえる声で音読するだけの活動である。交代した後、全体の前で音読の成果を披露する。きちんと練習した生徒はクラス全体の前でも恥ずかしがらずに堂々と読んでいた。

6.1.2 グループワークによる内容理解

個人で取り組んでいた活動をグループにだけしたもの。①日本語に相当する英語のまとまりを見つけ出す活動②キーワードになっている英文の解釈③英作文：キーワードを用いて自分のことを表現する。

毎回課題は異なるが、グループで課題に取り組み、答えをグループ内で確認した後、クラス全体で答え合わせをする。翌日、復習を兼ねて個人を指したところ、どのクラスも全員が解答した。個人で活動していた時には答えられない生徒がどのクラスにもいたのだが、グループで活動した後は、全クラスで復習時に分からないと言った生徒がいなかった。驚きである。グループでの活動を各生徒が意識して取り組んだため、記憶に残っていたと考えられる。

6.1.3 生徒のやる気を引き出すグループワーク

英語Ⅱの教科書に載っている Reading に関して、質問を解くことで内容が分かるようなプリントを作成した。単語の発音のみクラス全体で確認し、後はすべてグループワークとした。活動は以下の通り

- ① 班長、発表者、確認係、単語調べ係をグループ内で決定する。
- ② 協力して質問に答える。
- ③ すらすら読めるまで音読練習する。 (ここまでの12分～15分)
- ④ クラス全体で答え合わせをする。発表、または黒板に書かせる。
- ⑤ あらかじめ区切っておいた読みのパートを分担し、自分のパートを練習する。
- ⑥ 読みのリレーを実施する。第1走者から立って読み、終わったら次のパートの担当が立ち上がって読む。一番早く読み終わったグループの勝利とする。

6.2 平成23年度 生徒のやる気を引き出す声かけや働きかけに関して

6.2.1 実験群に対し言い続けたこと

- ・英語は突然できるようにならない。
- ・単語は覚えなければ、使えない。(活用・意味・スペル・発音など)
- ・英語はこつこつやれば必ず努力が報われる教科である。
- ・自分の覚え方を探すこと。覚えるとは覚えるまで取り組むことである。
- ・できるようになっている自分を実感すること。
- ・間違いから学ぶことはたくさんある。間違いを恐れるな。気取るな。たくさん恥をかけ。

- ・担当教員としていつでも力になるということ。

以上のことを毎時間授業の始めに語り続けた。

6.2.2 目標を持たせる（2学期末考査の2週間前に実施）

- ① 考査前にこれまでの3回分の考査の素点を記入した紙を生徒に配布する。
- ② 2学期末の目標点を書かせる。
- ③ 目標点に達するために必要なことは何か、具体的に書かせる。
- ④ 目標に向かう時に、壁になっていることは何か、書かせる。
- ⑤ その壁を乗り越えるためには、どうすればいいのか書かせる。
- ⑥ 任意で提出させる。提出した生徒には具体的なアドバイスを記入して返却する。

32名中、28名が提出した。生徒が自分の弱点をよく分かっており、どうすべきかを詳しく書いてきたことには非常に驚いた。目標を設定したことで、普段より早めにテスト勉強に取り組む生徒もいた。また個別にアドバイスを与えたことで、気にかけてもらえている、授業の様子を見てもらえているという安心感からか、生徒は質問がしやすくなったようである。

6.3 平成24年度 授業に関して

6.3.1 ペアワークでの活動メニュー

①チャンクごとのいちいち読み

プリントを見ながら音読。生徒Aがチャンクごとに区切って読み、生徒Bはリピートする。読み終わったら役割を交代して行う。2回目は一文ずつでリピートする。

②追っかけ読み

生徒Aが一文読み終わったところで、生徒Bが読み始める。生徒AはBに追い越されないように読み終える。役割を交代して行う。読む範囲を長く設定すると、先に読む生徒が遅い場合は追い抜かれるので、盛り上がる。

③文法問題・口頭練習

英語Iで取り扱った基本的な文法問題をまとめたプリントを使用する。相手の解答がのっているプリントをお互いが持ち、質問に答える（自分が答えるべき問題には答えが示されていない）。答えを書くことなく、初見ですぐに口頭で答える練習。どんどん問題をこなすうちに、生徒自身が法則を見いだすことがねらい。終わったらプリントを交換して行う。

- ・ be動詞の否定文・疑問文の作り方
- ・ 一般動詞の否定文・疑問文の作り方
- ・ 助動詞の並べ替え問題
- ・ 関係代名詞の穴埋め問題
- ・ 現在分詞・過去分詞の穴埋め問題および並び替え問題
- ・ 動名詞の穴埋め問題
- ・ 現在完了の並べ替え問題

ハンドアウト例1 文法問題・口頭練習

プリント〈A〉 網掛けの番号を解答する	プリント〈B〉 網掛けの番号を解答する
1 () 内から適切なものを選びなさい。	1 () 内から適切なものを選びなさい。
1. I (was / were) in New York ten years ago.	1. I (<u>was</u> / were) in New York ten years ago.
2. My sisters (was / <u>were</u>) at home yesterday.	2. My sisters (was / were) at home yesterday.
3. It (was / were) very hot last month.	3. It (<u>was</u> / were) very hot last month.
4. (Was / <u>Were</u>) you busy last week?	4. (Was / Were) you busy last week?
2 文末に () 内の語を加えて、過去形の文にしなさい。	2 文末に () 内の語を加えて、過去形の文にしなさい。
1. She is in London. (last year)	1. She is in London. (last year)
2. We are at home. (last night)	She was in London last year.
We were at home last night.	2. We are at home. (last night)
3. I'm a nurse. (ten years ago).	3. I'm a nurse. (ten years ago).
4. They are in Tokyo. (last month)	I was a nurse ten years ago.
They were in Tokyo last month.	4. They are in Tokyo. (last month)

ハンドアウト例2 文法問題・口頭練習

プリント〈A〉 網掛けの番号を解答する	プリント〈B〉 網掛けの番号を解答する
1 次の英文を①疑問文と②否定文にしなさい。	1 次の英文を①疑問文と②否定文にしなさい。
1. He was in the library yesterday.	1. He was in the library yesterday.
2. Your parents were busy.	① Was he in the library yesterday?
① Were your parents busy?	② He wasn't in the library yesterday.
② Your parents weren't busy.	2. Your parents were busy.
3. He studied math last night.	3. He studied math last night.
4. You helped your mother yesterday.	① Did he study math last night?
① Did you help your mother yesterday?	② He didn't study math last night.
② You didn't help your mother yesterday.	4. You helped your mother yesterday.
5. You bought a bicycle last month.	5. You bought a bicycle last month.
6. Bob knew the news.	① Did you buy a bicycle last month?
① Did Bob know the news?	② You didn't buy a bicycle last month.
② Bob didn't know the news.	6. Bob knew the news.
2 次の動詞の過去形・過去分詞を言いなさい。	2 次の動詞の過去形・過去分詞を言いなさい。
1. go 2. eat, ate, eaten 3. write 4. give, gave, given	1. go, went, gone 2. eat 3. write, wrote, written 4. give
5. see 6. make, made, made 7. know 8. buy, bought, bought	5. see, saw, seen 6. make 7. know, knew, known
9. teach 10. leave, left, left	8. buy 9. teach, taught, taught 10. leave

6.3.2 グループワークでの活動メニュー

① 1 文リピート

4 人のグループを作り読む順番を決める。2 人目まではハンドアウトを見ながら音読

できる。3人目はハンドアウトを見ないで音読。4人目は3人目が終わったあと、3秒数えてから見ないで音読する。メンバー全員で3秒数えると（カウントダウンする）盛り上がる。

②暗記&暗写活動

グループの人数分の英文（重要な構文など）をプリントにし、番号をつけて廊下に張り出す。それぞれのグループの代表者1名が廊下に出て、1分間で英文を暗記し、教室に戻って覚えてきた英文を紙に書く。メンバー全員が終わったら、班長が最終確認を廊下に出て行い、間違った箇所があれば、1分間で訂正する。（正確に多くの英文が書けたグループを優勝としている）

③聞き取り競争

教科書の本文をCDで聞かせる。途中で一時停止し、最後に聞き取った単語を書く。終わったら教科書で確認し合い、正答数が多かったグループの優勝とする。

7 研究評価

7.1 平成23年度の総括

平成23年度の授業に関しては、ペアワーク・グループワークを取り入れて以降、生徒の授業に対する姿勢が明らかに変わっていった。生徒自身も授業に参加しやすくなったようである。まず、静かな教室で発言する必要がなくなったということ、分からないところはペアに確認できるということ、そして前回の授業でやった内容をよく覚えていることが、生徒を前向きに授業に向かわせていた。表1は23年度の最後の授業でとったアンケート結果である。最後の項目に関して、実験群は統制群より高い数値を示している。ペアワークやグループワークを通して授業に参加し、様々な課題に取り組んだ。実験群の生徒は自分なりに勉強した実感があったからこそ、その結果がアンケートにも反映されたのではないかと。

表1

	統制群 1	統制群 2	実験群
英語の授業を今までより頑張ろうと思えた	51, 8%	63, 2%	53, 0%
実際に英語の授業には積極的に取り組んだ	25, 9%	39, 9%	40, 5%
勉強すれば英語の授業がわかるようになると実感した	51, 8%	59, 9%	65, 6%

表2は23年度に担当したクラスの考査の平均点である。この年、実験群に選んだクラスは1学期の中間考査で平均点が一番低く、提出物に関しては未提出の生徒が一番多かった。一人一人がどこことなく無関心で、クラス全体がそのような雰囲気を許容していた。1学期の中間考査以降、実験群の生徒たちにはペアワーク・グループワークを統制群のクラスよりも多く取り入れて授業を行った。また、毎時間のように励まし、やれば出来ると言いつづけた。彼らもそれを信じてよく頑張り、手ごたえを感じていたように思う。最終的には学年末考査で、統制群1のクラスと平均点が並んだ。

表2

考査の素点平均

	1学期中間	1学期末	2学期中間	2学期末	学年末
統制群 1	62, 4	56, 1	43, 1	48, 0	70, 6
統制群 2	63, 6	60, 3	51, 0	56, 0	74, 9
実験群	58, 4	56, 4	49, 0	53, 1	70, 4

実験群はペアワーク・グループワークを取り入れて以降、積極的に授業に参加し、授業に前向きに取り組んでいたのは確かである。クラス全体の雰囲気が明るくなり、全員で授業を作りあげている実感があった。私が生徒一人一人に声をかけ具体的にアドバイスをしたことや、励まし続けた結果、生徒はどうかやる気を維持し、英語の授業に取り組んだとみることもできる。

また、考査前に目標を設定することで、授業に対してどう取り組み何をすべきか生徒自身が考え、不得意な部分に取り組んで、考査につなげることができたのではないかと。実際、学年末の考査後、実験群の多くの生徒がテストの手応えを私のところに言いに来ている。「勉強したから今回のテスト、いつもよりいいと思う」多くの生徒がこう言いに来た。

23年度の授業実践を通して分かったことは、生徒は黒板を写して、授業を聞いているだけよりも、実は活動をしたいと思っていることである。英文が上手に読めれば、人に聞いてもらいたいし、クラス全体の前では恥ずかしいから、その前に確認したい。自信がない生徒にとって、ペアワークやグループワークは前向きに取り組むことができる活動であるのは間違いない。

また、本校の生徒は教師に個人的に関わってもらいたい、個人的なアドバイスをしてもらいたい、と望んでいるようだ。全体に言っていることを自分のこととして受け止めることができないため、人とは違う、自分だけに言われるアドバイスを嬉々として受け入れる傾向にある。個人的なつながりを軸に生徒のやる気が促されるのであれば、取り組む価値はあると考える。

7.2 平成24年度の総括

24年度は中間考査で平均点が高かったクラスを統制群とし、残りの2クラスを実験群とした。中間考査後、実験群にはペアワーク・グループワークを取り入れながら授業を進め、英語を声に出してみることを授業の中心とした。表3は1学期の中間考査、期末考査の平均点である。

表3 (人数)

得点	統制群 (41人)		実験群1 (40人)		実験群2 (40人)	
	中間考査	期末考査	中間考査	期末考査	中間考査	期末考査
29点以下	0	0	0	0	0	3
30～44点	2	4	2	4	3	4
45～64点	8	21	10	21	10	19
65～79点	15	13	18	9	16	6
80点以上	16	3	10	6	11	8
平均点	73点	61点	69点	60点	69点	60点

期末考査の平均点は統制群が実験群をわずかに1点上回るが、ペアワーク・グループワークの効果は見て取れる。期末考査において、統制群で80点以上を取った生徒は3名だったのに対し、実験群の2クラスでは若干ではあるが、統制群を上回っている。ペアワークにより音読ができるようになることで、英語に対する抵抗感が少なくなり、読めない単語は実は

意味も分かっていないということに、生徒自身が気付き始めた。ペアワークの①チャンクごとのいちいち読みは、文字通りいちいち読むので時間がかかり気の遠くなるような活動であるが、私が思っているほど生徒は単語が読めるわけではなかった。始めに読みの確認をするのはその後の活動に大きな影響を及ぼす。時間はかかるが、この活動は効果があった。

また、グループワークの②暗記&暗写活動を行った際には、廊下に出て暗記してきた生徒が書いた英文に対し、文法的な間違いを指摘したり、メンバーでスペルを確認し合うなどの活動も見られた。また、一人の生徒が「読めないと、言うこともできないし、書くこともできない」と言っていたのが非常に印象に残っている。読むことの大切さを生徒自身が気付いただけでもこの活動には意味があったと思っている。

読めない単語や解答できない問題があった場合、生徒一人では分からないままにしがちであるが、パートナーやグループのメンバーがいることですぐに確認ができ、やる気を失うことなくスムーズに次に進めるようである。また、読めない単語を仲間と一緒に確認したという行動が、その単語を意識するきっかけになるようであった。

もう一つグループワークをする際に特に言えることは、ゲーム感覚でできたり、競争心を駆り立てるような工夫が必要だということだ。生徒の取り組みが非常に良く、授業の雰囲気も一変して盛り上がる。興奮しているため、実は学習した内容なんて覚えていないのではないかと思っていたが、グループが1位になれなかった原因、すなわち、どの問題で間違えたとか、スペルをこんな風に間違えた、ということを生徒はよく覚えていた。次は間違えないように正確に覚えようという自覚を持つようになった生徒も多かった。

表 4

	統制群	実験群 1	実験群 2
Lesson 1	9, 5	9, 2	9, 0
Lesson 2	9, 3	9, 1	8, 8
Lesson 3	8, 3	7, 6	7, 7
Lesson 4	7, 8	7, 5	7, 6

表 4 はLessonごとに行った小テストの平均点である。これは私が期待するような結果にはならなかった。すべてのテストにおいて、統制群の平均点が実験群のそれを上回る結果となっている。授業に意欲を持って参加し、積極的にペアワーク・グループワークに参加しているが、筆記で解答するとなると、実験群には単語のスペルミスをしたり英問英答の答え方などが全く分かっていない生徒が多い。個々の生徒を見渡してみると、この結果には個人的には納得がいき、やる気があっても、高評価につながらない痛い部分である。例えば、下記の小テストの1の問題に関しては、答えを口頭で言えるように何回も発音練習し、ほとんどの生徒が教科書を見ずに、日本語を聞いて、それに対応する英語を口頭で解答できるようになったが、それを書かせるテストになると、スペルが書けない、といった具合である。

口頭で解答できた英文は正しく書けるはずだと私自身が思い込んでいただけのことで、言うことはできるが正しく書けないことはたくさんある。授業では口頭でのやりとりだけだったので、小テストには反映されなかった。あたりまえのことだが、書く練習をしなければ、書くことはできないのだと実感した。

小テストの例

Lesson 2 小テスト	
	<u>Class</u> <u>No.</u> <u>Name</u>
I 以下の意味を示す英文を書きなさい。	
1.	4年ごとに
2.	人はそれをロボカップと呼ぶ。
3.	ロボット工学を発展させるために
4.	解決すべき問題がまだたくさんある。
II 簡潔に答えなさい。	
1.	Who plays soccer in the RoboCup?
2.	When did the robot soccer competition start?
3.	Who thought of this idea?
III 日本語の意味になるように () に適語を書きなさい。	
1.	みんなは彼をイチローと呼びます。 Everyone () () Ichiro.
2.	彼は私たちに希望と勇気を与えてくれます。 He () () hope and strength.
3.	私は友達とテニスをするのが好きです。 I like () () tennis () my friends.

この小テストの結果は、多くの先生方を悩ませている問題に通じている。新しい学習指導要領の下で外国語表現の能力を評価する場合、その観点の趣旨は「外国語で話したり、書いたりして、情報や考えなどを適切に伝えている」であり、「書くこと」に関しては、「聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く」とある。簡潔に書いてあるが、スペルミスだらけである場合も出てくる。その場合、まったく書けない、又は、書かない生徒よりは、評価は高くあるべきだと私は考えている。筆記テストを課すことで生徒に何を求めるのかをはっきりさせなければならない。

会話中の文法的な間違いなどはたいした問題ではない、という意見があるが、私もどちらかと言えばこの意見に賛成である。会話の流れから相手の言いたいことは十分推し量れるし、いちいち会話を中断してまで間違いを正そうそうとは私は思わない。ただ、上記の小テストの場合は筆記のテストなのだから、スペルミスは見過ごす訳にはいかないだろう。口頭での練習と筆記の小テストでは、試験の性質上求められるものが異なったため、私の期待する結果にはならなかった。テスト作成上注意すべき今後の課題となった。

以下は平成24年度、ペアワーク・グループワークについてのアンケート結果である。

(1) ペアワーク・グループワークは好きですか？

はい (92, 5%)

いいえ (7, 5%)

(2) ペアワーク・グループワークのいいところはどんなところですか。(複数解答可)

①分からないところを相手にすぐに聞ける。	5 5 %
②ひとりではやる気にならないが、相手がいるとやる気になる。	3 7, 5 %
③相手の答えを聞くのが楽しい。	5 %
④授業内容の理解に役立つ。	2 5 %
⑤一人で勉強するより記憶に残る。	2 5 %
⑥飽きないで授業を受けられる。	5 7, 5 %

(3) ペアワーク・グループワークの活動でどのような効果があったと思うか。(自由記述)

(肯定的な意見)

- ・ 読む練習が嫌ではなくなった。
- ・ 勉強する雰囲気になるから、頑張ろうと思える。
- ・ ゲーム感覚で覚えることができるので、楽しい時もある。
- ・ わからないところを調べるのが面倒ではなくなった。
- ・ 何をやっているか、やることが分かるので参加する気になる。

(否定的な意見)

- ・ うるさくなるときがあるから好きではない。
- ・ 自分ができないことが人にばれてしまう。
- ・ グループで話す人がいつも決まっているので、グループを変えて欲しかった。
- ・ 盛り上がらないグループは辛い。
- ・ 人見知りだから嫌いだし、面倒くさい。

(4) 生徒個人の授業に対する評価 10点満点で評価する (平均点)

	統制群 41 人	実験群 80 人
① 授業の楽しさは	5, 4 点	5, 8 点
② 授業への参加点は	6, 3 点	7, 3 点
③ 授業に対するやる気は	5, 4 点	6, 5 点
④ 授業の理解度は	5, 6 点	6, 2 点

7.3 研究の総括

ペアワークに関してはほとんどの生徒が中学校で経験しており、全く抵抗なく取り組むことができた。昨年度本校に着任して2年生を担当した。彼らの多くは1年次にペアワーク・グループワークをやらなかったため、私の授業でペアワーク・グループワークに取り組むには時間がかかり、苦労した。しかし、多くの生徒が中学校でペアワーク・グループワークを経験しているのであれば、是非、高校の授業でも継続してペアワーク・グループワークを取り入れ、発話すること、会話することは英語の授業では当たり前であると認識させるべきだ。否定的な意見に出てきた「人見知りだから・・・面倒くさいから・・・」という生徒には、教科の特性や評価基準を説明し納得させる必要がある。「自分ができないことが人にばれてしま

う」という理由から口を閉ざし、ペアワーク・グループワークに参加しない生徒に関しても、その自意識を解放させるような個別の対応をしなくてはならないだろうが、まずは、授業はできないことや分からないことが学べる場所だということを生徒に伝えることが重要である。多くの生徒にとって、学習意欲や授業への参加意欲を向上させ、また、持続させるために、ペアワーク・グループワークは必要であり、有効であることが分かった。

生徒が主体的に取り組む授業にするにはどのようにすればいいのか、生徒をやる気にさせるという点に焦点を絞り、ペアワーク・グループワークを中心に授業を展開した。生徒は確かに生き生きと授業に参加し、与えられたテキストを読めるようになったり、内容に関する質問の答えをペアと確認できるようにはなった。また、目標をたて、その目標を達成するために何をすべきか考え、自分なりに勉強し考查の点数をアップさせることに成功した生徒もいる。しかし、テキストの中身に関して生徒自身がどう考え、どのような意見を持ったのかを相手に伝えるという活動には至っていない。今後英語の授業に求められることは、インフォメーションギャップのような単に情報をやりとりすることではなく、得た情報について生徒自身の解釈を加えたり、意見や考えを交換し合う場として授業が存在するということである。私の授業ではまだまだそこに至っていない。「生徒にも私にもそんな授業は無理だろう」から「もしかしたらできるかもしれない。やってみよう」という地点に立ち、コミュニケーションな授業を目指して研究を続けようと思っている。

8 引用文献・参考文献

8.1 引用文献

斉藤栄二『これだけは知っておきたい 英語授業レベルアップの基礎』(1996)大修館書店
ゾルタン・ドルニエイ著 米山朝二/関昭典訳 『動機づけを高める英語指導ストラテジー
35』(2005)大修館書店

西林慶武・高椋勇一『目指せ！英語授業の達人12 授業が変わる！最強の英語ペアワーク
&グループワーク25』(2010) 明治図書

8.2 参考文献

大下邦幸『コミュニケーションクラスのすすめ コミュニケーション能力養成の新たな展望』
(2009)東京書籍

白畑知彦・編著 若林茂則/須田孝司・著『英語習得の「常識」「非常識」 第二言語習得
研究からの検証』(2004) 大修館書店

安木真一著『目指せ！英語授業の達人10 英語力がぐんぐん身につく驚異の音読指導法54』
(2010) 明治図書

田中武夫・田中知聡著『英語教師のための発問テクニック』(2009) 大修館書店